

共同研究を終えて

研究代表者 高城 玲

本共同研究最終年度の2013年は、アチックミュージアムの中心にいた渋沢敬三の没後50年という節目の年であった。特に2013-2014年にかけては、没後50年に関連する渋沢敬三記念事業として、特別展示・企画展示やシンポジウム、講演会など数多くの企画が各所で催され、改めてその業績が注目された時期でもある。また、本叢書でも焦点を当てている薩南十島調査は、1934（昭和9）年に実施されており、2014年はそれから数えてちょうど80年目にもあたっている。こうした50年と80年という二重の意味での節目の時期に、本共同研究では、『国際常民文化研究叢書8 [資料編]』と本叢書10 [論文編] の2冊の成果報告書を刊行することとなった。

これら2冊の成果報告書でも取りあげている薩南十島調査に関して、ここで振り返ってみると、今から80年も前に渋沢とアチックミュージアム同人らが成し遂げようと試みた先駆性に改めて驚愕させられる。80年前、渋沢らは、前年に初めて就航したばかりの航路で、各分野の研究者からなる共同調査を組織し、しかも当時最新鋭のカメラと16ミリ撮影機を用いて、島で暮らす一般の人々の日常生活とモノを記録におさめているのである。こうした渋沢とアチックミュージアム同人らの記録・収集と調査に対する強い意志は、まさに刮目に値すると言えるだろう。

ここでは、2つの意味で先駆的だった。第1は、一般の人々の日常生活を多角的に調査しようと試み、同時に、写真のみならず動画フィルムでも記録に残したという点である。第2は、短期間とはいえ各分野の専門家が20名余りも参加し、共同で調査・研究を行ったという点である。

特に、第2の共同調査・研究という点に関して、本共同研究も渋沢とアチック同人らの薩南十島調査から約80年の時を経て、各分野からの研究者に参加頂き、共同での調査と研究を試行してきた。もちろん本共同研究は、薩南十島調査時の規模や重要性とは比較にならないささやかなものではあるが、その難しさの一方で、共同で調査・研究することの醍醐味を多少でも経験することができたように思われる。つまりそれは、研究者ひとりの視点のみでは思いもよらない視点や事実の伝え合いという醍醐味であり、また、個別の視点をアチックフィルム・写真という対象に関して互いに交錯させることで、共同研究者同士が互いに思いもよらなかった新たな視点が生み出され得るという醍醐味でもある。

本叢書10 [論文編] でも、アチックフィルム・写真というテーマを軸に多様な分野の論者によるそれぞれの視点が接触し、交錯しながら各論考が展開されている。そこでは、必ずしも同じ視点のみで統一されているわけではない。むしろ、多様な分野の視点が共に集まりながら、互いに響き合っている時には競い合う、そうした多様性が〈共 / 響 / 競〉〈演〉し合う共通の舞台・作業場として、この共同研究や本叢書が何らかの意味を見いだし得ていれば幸いである。

本共同研究の遂行においては、多くの方々からご協力を頂いた。まず、鹿児島県十島村口之島と中之島の島民の方々、特に口之島小中学校前校長の日高松行氏と役場中之島出張所の徳丸秀樹氏、また、台湾屏東県のパイワン族住民の方々、特に中華民国行政院原住民族委員会の林志仁氏と地元研究者の華阿財氏には、それぞれ現地上映会の開催で多大な協力を頂いた。また、関連する資料の閲覧や提供に関しては、宮本記念財団の宮本瑞夫氏や国立民族学博物館、渋沢史料館からご協力を頂いた。他にも、最終年度の成果発表会では民俗学写真家の須藤功氏から貴重なコメントを寄せて頂いている。そして、本共同研究の調査と2冊の叢書編集に際しては、国際常民文化研究機構の事務局・編集スタッフ、関係者の方々に大変お世話になった。ここに記して深く感謝申し上げたい。

神奈川県日本常民文化研究所には、本共同研究で主として取りあげた映像資料以外にも多くのアチックフィルム・写真が所蔵されている。それらの映像資料をいかに整理・調査していくかは今後に残された課題でもある。今回の現地上映会を中心とする資料整理・調査の方法や研究が、今後のアチックフィルム・写真研究へのひとつの参照点となっていけば、本共同研究の目的の一端は達成できたと言えるだろう。